

## 演劇的表現活動の実践 ～児童文化演習の実践活動より～

佐藤 厚  
Sato Atsushi

キーワード：劇あそび・リーダーシアター（朗読劇）・ドラマによる表現教育・コミュニケーション

### はじめに

近年幼児の表現活動においては、音楽・絵画・造形・身体表現・演劇表現（劇あそび）、など様々な分野で行なわれている。筆者が過去3年間に渡り本学児童文化演習履修の学生達と共に、本学附属幼稚園で各年度それぞれ1回ずつ演劇的表現活動を行ってきた。本実践記録は、本年度（平成22年）の活動を中心にまとめ、学生達の指導者としての資質開発と附属幼稚園とのコラボレーションの可能性を探求したものである。

また、朗読劇については、そのはじまりから授業と実践活動中での効果や応用展開を、脚本は原作を掲載した。劇あそびは原作に伴い本実践活動用に構成脚色した部分があり、さらに活動中においては子どもたちの反応や活動の様子を見つつ内容が変化していったものを掲載した。

### ◆児童文化演習の実践活動の目的

〈学生たちにとって〉

- ・附属幼稚園の子どもたちと表現する楽しさを共有する。
- ・保育者を目指す者として、実際に子どもたちの前に立ち、指導、表現することになるまでに、より多くの子どもたちの前でお話を演じたり一緒に劇を遊ぶ中で、自己表現力の向上と、学生自らが保育者になるべく資質を探る。
- ・演劇表現活動を通じ、様々なキャラクターを研究模索する中で人間観察力やそれぞれの立場を理解する力を養う。

〈子どもたちにとって〉

- ・お話（フィクション）の世界を十分楽しむ。
- ・劇あそびを通じて、自己表現できる子どもや、少々恥ずかしがりやの子どもも、共に楽し

みながお話の世界を共有することで、互いに助け合い、理解し合う「コミュニケーション力」を育てる土台とする。

- ・自己表現することに自信を持つ。

◆対象

- ・上田女子短期大学附属幼稚園全園児（年少から年長 163名）

◆実施内容

- ・「指あそび手遊び」
- ・朗読劇「吉四六話（きっちよむばなし）」
- ・劇あそび「スカーフ売りとサル」～素話から劇あそびへ～

◆実践メンバー

- ・平成22年度 上田女子短期大学幼児教育学科2年生 児童文化演習履修者15名

【朗読劇のはじまり】

アメリカの大学には、スピーチ・コミュニケーションSpeech Communicationあるいはそれに類似の学科を持つところが多い。そこでオーラル・インタープリテーションOral Interpretation（口頭講釈とでも訳すか）、つまり文章の内容や感情を音声として表現し、豊かに伝えようとするもので、詩や散文、劇などがその教材としてよく用いられてきた。その中であってニューヨーク市立大学のメルビン・ホワイト名誉教授や、ミズリー州立大学のレスリー・コーガー博士らを先駆者とし、現在ではサンディエゴ州立大学のウィリアム・アダムス教授らによって、リーダーズ・シアター（朗読劇）という新しい表現の分野が開発されている。注目すべきは、ホワイト教授にしろアダムス教授にしろ、社会学者であり、人間関係学の具体的方法論として考案され実践されてきたものであって、演劇学のコーガー博士はその趣旨に副って演劇の側からのサポートをされたものである。

アメリカではプロ劇団の斬新な舞台演出方法として注目されているほか、20世紀後半、学校教育の場で、さらに図書館における読書指導として文学作品に体験的全人的に触れさせる方法として使われ、また移民子弟の語学教育（バイリンガル）としても効果を上げている。あまり動かずに済むことから、肢体不自由者の劇活動として、台本を持ったまま暗記を必要としない為、高齢者のドラマとしても最適なものとしてされている。

【朗読劇の特色】

普通、舞台劇の上演のためには、まず戯曲という劇形式で書かれた台本を必要とする。それは主として現在形で書かれ、俳優たちは現在の自分のこととして対話し行動する。ところが朗読劇の素材となるのは、小説、劇、詩、童話、民話、寓話、随筆、日記、報道記事、映画シナリオ、ラジオ、テレビの台本など、あらゆる形式のものが可能である、出演者のうち、ナレーターは物語を過去形で語り、三人称で客観的に語る場合が多い。これは、小説など文学作品の

手法そのものである。その特色として、語り手（ナレーター）の存在にある。特にナレーターを使わないにしても、視点は常に劇的であるより語りのである。定義としては「文学を目に見えるように、耳に聞こえるように観客に伝えること」という。耳に聞こえるというのは、言語の音声表現によって、より豊かに内容を伝えようとするものである。目に見えるというのは単なる朗読ではない朗読劇たる所以であろうが、いわゆる写實的、具象的表現でない、丸歌舞伎のような独自の様式性や抽象表現によって観客の想像力を刺激し、観客が文学の世界を脳裡に思い浮かべることができるような視覚的表現が求められる。シンプル・リーダーズ・シアターといわれる演出方式では、わずかなスツール（回転椅子）と譜面台を横一線に並べるだけであり、衣装も無性格な黒一色とするが、これは一切の先入観をさげ、見たり聞いたりすることによって観客に自由な想像世界を解放しようということなのである。また、観客の注意を文学に集中させるために、役を受け持つ語り手は、常に役と強く同化し、ナレーターは常に批判的であり、時に同情的である。

朗読劇の凝縮された表現では、特に視線が重要である。オンステージフォーカスとは登場人物相互に存在を認め合い、相手を見つめて話したり、目でコンタクトを取ったりすることである。これは普通の劇でも使われ、朗読劇でも使うことがある。朗読劇として特に効果的に使用するのはオフステージフォーカスといわれる手法である。語り手は観客席の後方に焦点をおき、そこに相手役の存在をまざまざと感じて語るかけ、そして聞くのである。真正面を向いて、顔の表情がはっきり見えることから、観客は人物の心理や状況をより深く想像しやすい。また主としてナレーターが用いるオフステージフォーカスだが、直接観客席に語りかけるやり方で、舞台と観客との間に親しい交流関係をつくるために効果がある。これらのフォーカスをいつ、どれを、どう用いるか効果的に採用し、意味のない外面的な挙動に観客の注意を奪われてしまわないようにすべきである。

（以上、岡田陽「子どもの表現活動」玉川大学出版部 p.158～p.168より引用）

#### 【子どもたちの前で発表する「朗読劇」】

今回履修した学生達にとって、朗読劇は初めての体験である。いきなり台本読みから劇活動を行うことは、表現力を高めるところか、かえって自己表現能力向上の妨げになりかねない。そこで、授業の半分は、自己表現することへのわだかまりをなくすために即興劇の要素を含むシアターゲーム等を行った。シアターゲームでは、まわりをよく見て距離感をつかむものから、即時的に発想力を求め表現するもの等、失敗を繰り返しつつ表現する楽しみを体得していく。一般的に、集団の中での失敗は恥ずかしく悪いイメージに感じるが、シアターゲームの中での失敗はわざと狙ったものでない限り、個人の内面的な自立心や向上心にとってはむしろ歓迎されるべきものである。失敗を恐れびくびくし、同年齢の仲間内では表面的に上手く取り繕うことができたとしても、子どもたちの前に立った時はごまかしはきかない。子どもたちの前に立つ前に、前向きに取り組みながらも失敗も体験しそれを克服していく過程にこそ意義があり、むしろ技巧的なことばかり上達させることより勇気があるだろう。そして、やがて子ども

たちと接していく中でも、きっと自身の失敗もあるだろううまくいかないことにも直面するはずだ。自身が克服していくと同時に、さらに子どもたちの失敗に対しても、その時どのように対処し克服させていくかが指導者としての真価が問われる。職場のメンバー(先輩・後輩・同期)との人間関係においても同様なことが言えるのではないか。様々な演劇の手法を教育現場に用いその効果を期待されてきている中、指導者養成においてもその手法を用いたプログラムが必要とされよう。

〈学生たちによる朗読劇の実際と応用展開〉

表現活動の実践に入る前には必ず、学生側は子どもたちとのほど良い距離感を掴んでおく必要がある。子どもたちにとっても初めて接する15人の大人の女子学生集団には、やはり緊張と



興奮を覚えずにはいられないであろう。

そこで、まずは日常保育の中でも行われている、指あそびや歌あそびを行い、緊張をほぐすと同時に舞台発表観劇と後に参加して行う劇あそびへの集中を高めていった。朗読劇作品の一つを完璧に仕上げるためには容易なことではない。まして15回の授業の中で、2週間の実習が2~3人ずつ交互に

前期期間に含まれている中となると全員が揃っての稽古は3回ぐらいであった。そこで今回、効率良く稽古を進めるにあたり原作の「吉四六話」の構成とは異なり、小さい頃の吉四六・年ごろになった吉四六・いい年になった吉四六、と場面毎(3場面)に人選しての構成・発表とした。学生たちにとっての朗読劇表現は初めての経験となるもので、特に表現手法としてのオフステージフォーカスなどは慣れるまでは違和感を覚えたに違いない。しかし、一度その手法と感覚を身につけると、実際の保育現場で子どもたちと関わりを持つ様々な場面で応用展開できる。声のトーンや視線を応用する絵本の読み聞かせ・紙芝居・素話はもとより遊戯やダンス、造形発表や保育発表会等における空間把握にも応用できる。また、朗読劇は基本的に一旦舞台上に登場すると終演まで出たままのことがほとんどである。自分の存在を消すには後ろを向く程度であるが、これも後ろを向きつつ実際の場面が見えていなくても舞台上で繰り広げられている場面を想像し、背中では全体の進行状況を把握しながら再度自身の登場場面を待つのである。各保育施設等で担任ともなれば、朝子どもたちを迎え夕方見送るまで、常時子どもたちの前や集団の中にいることが多い。つまり保育現場が舞台とすれば、一日中気を抜くことはできない、舞台上にいるのと同様である。受け持っている子どもたちの一人一人が、今どんな活動をし、どんな状態かを把握しなければならない。保育園等では午睡中であっても保護者へのお手紙や保育日誌の記載をしつつ子どもたちの様子を気にかけている。さらには、病気やけがをした子どもと保護者へのケアは子どもたちの姿がそこにはない帰宅後にまで及ぶ。このように少々飛躍的発想ではあるが、演劇表現活動を保育士や幼稚園教諭等の指導者養成カリキュラム

の中に取り入れることは、表現活動だけでなく日常保育の様々な分野や場面において、子どもやその保護者、また職場の人間関係にまで及び、想像力、思いやり、気遣い、心配り、応用力、創造力そしてコミュニケーション力向上のメリットとなるベース作りとして欠かせないものであろう。

〈附属幼稚園で行われた朗読劇の脚本及び活動記録〉

【吉四六話】

瀬川 拓男 作

芹川季代子 構成

N1：吉四六どんは小さいころから風変わりだったそうなの。家のもんがみんな畑仕事の行くといふので、小さい吉四六が、るす番をすることになった。

N2：家のうらの庭の柿は、よううれてたいそう見事だったから、出がけに父親が言うた。

父親：これ、吉四六、うちの柿は今年が初なりじゃ。お前、気をつけて見ちよれや。

吉四六：はいっ。

N2：吉四六がかしこい返事をしたので、家のもんは安心して出かたそうなの。

N1：さて、夕方もどつてみると、今朝がた、柿の木のはたにすわりこんだ吉四六が、今もそこにじっとしている。

N2：父親はびっくりして言うた。

父親：なんじゃ、お前、一日じゅうそうしちよったんか。

吉四六：はい、気をつけて柿の木を見ちよれ言うたけん、こうしてよう見ちよったんじゃ。

N2：父親は、ふと柿の木を見あげた。

父親：や、や、やあ。うれた柿は一つもないが……こりゃ、どうしたことか。

N1：すると、吉四六は、すまして答えたそうなの。

吉四六：よう見ちよった。見ちよる前で、村のわかいもんが来て、次々と柿の木に登ってなあ。そうして、みんなもいで行ってしもうたんじゃ。よう見ちよったけん、まちがない。

N1：実は吉四六どん、父親が一つも食わせてくれんので、るすの間に村の子どもたちをよび集め、たらふく柿を食うたのだと。

吉四六：年ごろになった吉四六です。

N2：ぶらぶら遊んでもおられんので、川のわたしもりになったそうなの。

N1：あるとき、一人の武士が来て、吉四六にきいた。



武士：渡し賃はなんぼか。

吉四六：へえ、八文で。

N 1：と、吉四六が答えると、

武士：六文にまけい。

N 1：と、言うてきかん。

N 2：吉四六はあきらめたのか、

吉四六：よいよい。さあ、乗らんせ。

N 2：と、言うて、さおをさした。

N 1：ところが、あと少しで向こう岸に着くというとき、

吉四六：ここまでで六文じゃ。あいすまんが、ここでおりてくださらんか。

N 1：と、船を止めた。びっくりした武士が、

武士：そりゃこまる。こんな所におりられるか。

吉四六：そんなら、元の岸にもどるまでじゃ。

N 1：と、たちまち後もどりを始めた。

吉四六：おさむらい様、行きが六文、もどりが六文、行きともどりで十二文になりますわい。

N 2：吉四六の言葉に、武士もすっかり参って、

武士：急ぎの用じゃ。望みどおり金をはらうよって、向こう岸までとどけてくれい。

N 2：と、やっとのことで向こう岸にわたしてもうろうたそうな。



吉四六：いい年になった吉四六です。（その場にねて、いびきをかく）

N 1：吉四六どんのとんちの評判が町じゅうにに広まって、あるとき、殿様のお使いが、朝もはようからやってきたそうな。

お使い：すぐにもお城に上がるようにと、殿様のおおせじゃ。ついて参れ。

N 1：ねているところをたたき起こされて、何事かとお城まで来てみれば、殿様は、にやにやわろうて言うたそうな。

殿様：吉四六とやら、お前はうその名人と言うが、ひとつ、わしを上手にだましてみよ。ほうびをうんと取らすぞ。

N 2：物好きな殿様もあったものよ。朝早く起こされてごきげんななめの吉四六、ねむたげな目をこすりこすり殿様に言うた。

吉四六：なんかと思えば、そんなご用でござんしたか。それならそうと、ご家来に言うてくださりゃあよかったに。わしゃ、うそを言うとき、うその種本を使いますけど、それをうちに置いてきてしまいました。今から取りに行きますよって、殿様の馬をかしてくださんせ。

殿様：いや、それにはおよばん。

N 1：殿様は、ここぞとばかりに用心して、

殿様：そのことなら、家来に言いつけて取りに行かせる。うその種本とやらは、どこに置いてあるのか言うてみよ。

吉四六：へえ、ぶつだんのお位はいのかげに、かくしてありますな。

N1：そこで、家来が吉四六の家に飛んだ。だが、なんぼさがしても、種本など見当たらん。もどって殿様に申し上げると、殿様、

殿様：このうそつきめが。

N2：吉四六は、しめたとばかりひざを打って、

吉四六：へえ、うそを申しましたによって、ごほうびをいただきとうございます。

N1：これには殿様も、開いた口がふさがらなかった。ほうびに、一頭の馬に米俵を一つ付けてやると、吉四六は馬の片側にそれをつるした。片側ばかり重うなったので、馬は苦しがつて動こうにも動けない。

N2：そこで、吉四六は、殿様に申し上げたそうな。

吉四六：片荷じゃあ馬がたおれますけん、もう一俵くださいませ。両側へ一俵ずつつるせば、馬はしゃんしゃんと歩きますがな。

N1：殿様は、米俵をもう一つ取られて、なんともしぶい顔をしなさったと。

出典：「国語四上 かがやき」（光村図書出版）

### 【劇あそびに向けて】

関谷幸雄氏は「子どもが生き生きする瞬間の状態というのは『発見した時』じゃないですか。何かを見つけた時、自分で発見した時。それが大人から見て、どんなつまらないものでも、自分で発見した時というものは、ものすごく生き生きするようです。」と述べている。

（関谷幸雄「遊びのなかの演劇」晩成書房、p.44より）

我々大人が子どもたちの遊びに関わる時は、発見とその喜び、夢中になって楽しむ、その連続性の中でこそ生き生きとした瞬間が生まれなければならない。その上で、我々は一助言者としての存在であり、子どもたちの遊びに大人の提案が加わったほうが楽しくなると思われても、まずは提案前の状態を尊重し見守る必要がある。そして、子どもたちと遊んでいる時、遊び終わった時は感動ともいえる満足感と、次はこうしてみようと思える期待感に満ちていることが理想である。

劇あそびにおいては一連のストーリーに沿った活動となるが、前述同様「あそび」である以上子どもたちにとっては劇に対して自ら活動を楽しめる、環境・状況・ストーリー展開であることが望ましい。指導者側にとってみるとどうしてもこうあってほしい、と結末を急ぐことになりやすいが、あそびの展開はあらゆる可能性が秘められているからこそ楽しいのであって、決められた内容を押し付けたのでは子どもたちの楽しみは半減してしまう。今回の劇あそびでは、はじめに素話をしてからの活動であるので、素話でいかに子どもたちの興味・関心を惹き付けるかがポイントである。

まず最初にストーリーの中でメインの小道具となるスカーフを一枚ポケットから取り出し、ふわっと宙に浮かしてみる。軽い素材のスカーフの動きは一瞬にして子どもたちの関心を惹き付ける。そして「これ、な〜んだ？」の問いに対し様々な答えが返ってくる。「ハンカチ」「タオル」「布」等。中には「お母さんが首につけるもの」と生活経験の中での答えが出ると、「頭にもつけてる」「手首にも」等と一枚のスカーフを使った様々な状況が返ってくる。そして「これ、重たい？軽い？」の問いには「軽い！」。「堅い？柔らかい？」には「柔らかい！」と答えてくる。「みんな、触ってもいないのに良く分かるねえ。」と感心を示すと、子どもたちは少しずつ自信に満ちた笑顔になってくる。その後「このスカーフをギューって引っ張ったりしたら…」と動作と共に言うと、「ダメ、やぶけちゃう。」「あそべなくなっちゃう。」とこちらが注意を促さなくても、自分たちで楽しくあそぶ為のルールに気付くのである。こうした事前のやり取りを通じて、子どもたちとのコミュニケーションを図っておく。大切なことは実際に身体を動かす活動の前に、子どもたちが自分の考えや気付きを声に出して色々話すことで表現することへの抵抗をなくし、この劇あそび活動では「安心して楽しく活動していいのだ」という環境を設定することである。

そして、次の素話へと進んでいくのである。

## スカーフ売りと猿

あるところに、大きな森がありました。その中に、お猿の一族がすんでいました。一族と言うのは、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、弟、妹、親戚の伯父ちゃん、伯母ちゃん、従兄弟などなど、皆のことです。

その中にボス猿がいて、いつも森の中で一番高い木の上から皆のことを、やさしく見守っていました。ボス猿は時々「キーッ！キーッ！キーッ！」と大きな声で叫びます。これは何か危ないことが近づいた時の大事な合図です。この声が聞こえると、どんな時も、何をしていても、皆一斉に木の上に隠れなければなりません。そのお陰で皆は安心して暮らすことができるのでした。

ある夏の暑い日のことでした。いつものように皆が森で遊んでいると突然「キーッ！キーッ！キーッ！」と大きな声が聞こえました。皆一斉に、木の上に隠れました。

ボス猿が見ている森の入り口の方を見ると誰かやって来ます。それは、色とりどりのスカーフを街から街へ売って歩くスカーフ売りでした。それはそれは、きれいなスカーフでした。

スカーフ売りは、

「あ〜暑い暑い。もう何で売れないのかなー。こんなにきれいなスカーフなのに。あ〜あ疲れた。一休みしていこう。」





そう言って猿たちが隠れている木の下の、切り株で昼寝をはじめました。さっきからその様子を木の上からじっと見ていた猿たちは、きれいなスカーフが欲しくて欲しくてたまりません。でもボス猿の許しがないと下に降りてはいけません。そこでまず、ボス猿が降りて行きました。首に巻いてみたり、ふわ～と飛ばしてみたり、頭にかぶってみたりしました。そして、他の猿たちを順番に下に呼びました。猿たちはソ～と降りてきて、ボス猿から順番にスカーフをもらいました。猿たちは嬉しくなって、遊び始めました。ボス猿のまねをして飛んだりねたり踊ったりしました。あまりにもにぎやかになってきたのでスカーフ売りが目を覚ましました。ボス猿は慌てて「キーッ！キーッ！キーッ！」と大きな声で叫びました。他の猿たちも一斉に木の上になり、そ～と隠れました。スカーフ売りは、

「あ～あ良く寝た。え？あ、もうこんな時間。早く行かなくちゃ、日が暮れてしまう。さてとスカーフはっとなあ…。あれ？ない。スカーフがない！どこへ言っちゃったんだろう。おかしいなあ。ここかなあ？こっちかなあ。」と、あたりをうろうろ探し始めました。その様子がおかしかったので猿たちは「ウキキキ…。」と、わず笑ってしまいました。するとスカーフ売りが、木の上の猿たちを見つけて、

「あっ！スカーフ！」と叫びました。すると猿たちは「キッ！キキキ！」と言いました。「かえして」と言う「キキキキ」と言います。「おねがい」「キキキキ」「かえせー！」「キキキー！」「もう！」「キー！」全然返してくれません。困ったスカーフ売りは「こまったなあ～」と言うと猿たちも「キキキキキ～」と腕を組んでいます。

「あれ？」「キキ？」「あっ、そうか！」「キッ、キーキ！」そうです、猿たちはスカーフ売りの真似をしていたのです。それに気がついたスカーフ売りは、首に巻いていたスカーフをはずすと、

「はああ～い！」「キイイ～！」と言ってからスカーフをかばんの中に入れてみました。するとどうでしょう。まずボス猿が降りてきて、かばんの中に入れると他の猿たちもつぎつぎとスカーフをかばんの中に入れました。そしてまた木の上に戻りました。スカーフ売りはかばんのふたを閉め

「ありがとう！」と言うと「キキキキキ！」と猿たちも答えました。

「たのしかったよ」「キキキキキキ」「またねえ！」「キキキイ！」

そう言ってスカーフ売りの姿が森の向こうに見えなくなるまで手を振っていました。

森には夕日が射し始めました。猿たちは、スカーフ売りと遊んだことを皆で話していつまでも楽しく過しましたとき。

おしまい。

#### 〈子どもたちの舞台活動〉

この素話を、ストーリー・テラー〈進行役〉が以下の進行方法で劇あそびに展開していく。

さて、このお話をここに居る皆で楽しんでみたいと思います。まず、この舞台を森にして、

木が必要だね。この脚立を森の木にしましょう。

——脚立の周りは木に見立て、箱馬などを置く。

森の中の音は？

——SE (Sound Effect「効果音」の略) 鳥の声

そうそう、こんな感じだね。

次にこのお話に出てくるのは？猿？そうだね。一番強いのは？そうボス猿。

じゃあ、ボス猿は（私、又はこのお兄さん又はお姉さん、先生）にやってもらいましょう。

お母さん猿は、このお姉さん。お父さん猿は、このお兄さん。あと、お姉さん、お兄さんはこの人達にやってもらいましょう。

子どもの猿たちは、勿論みんなにやってもらいます。よろしくね。

あ、そうそう、猿が話す言葉は？「キーッ！」そうです、キー語だね。何を話すにもキー語で話すんですよ。

では、子猿たち、ゆっくり舞台上の上に上がってください。

——他のお兄さん猿、お姉さん猿が誘導する。みんな、脚立や箱馬などに上がって準備する。

さあ！準備ができたようです。それではここにいる皆さんでこのお話の題名を言ってみましょう。さんハイ「スカーフ売りと猿」はじまりで～す。

ここはお猿の一族が住んでいる森の中。いまは、夜。みんなすやすやと眠っています。やがて東の空が明るくなって朝になりました。

——SE 鳥の声。

まず、ボス猿が目を覚まし他の猿たちも目を覚ましました。そして、ボス猿といっしょに大きなあくびをしました。

——「あ～あ」と言うつもりで

「キ～ィ」

そして、みんな木から降りて、ご飯を食べたり遊んだりしています。（しばらく、間）そして、ちょうどお昼頃になったときです。

——本題に入り、舞台の進行はボス猿に任せ実践活動に移る。



——スカーフ売りが手を振りながら、劇場より退出。舞台とのタイミングを見計らって…、こうして、猿たちは楽しかった今日の出来事をいつまでも話していましたとき。

お・し・まい。

お猿のみんな、ありがとう。拍手！  
観ていただいた、お客様にも拍手！  
みんな、舞台から気をつけて降りてくださいね。  
——子どもたちが客席に降りて、落ち着いた頃、  
今日は、みんなと一緒に劇で遊べて楽しかったよ。  
また、一緒に遊べるといいね。みんなも、知っているお話をこんなふうに劇にして遊んでみてね。  
今日はこれでおしまい。  
みんな気をつけて帰ってね。さようなら。



### 【実践活動を終えて】

附属幼稚園での実践活動を通じ学生たちの様々な感想・意見・気づきがあり、全員分を掲載したいところではあるが、実践演習レポートを各項目毎にまとめてみた。

1. 朗読劇「吉四六話」劇あそび「スカーフ売りと猿」の表現活動を通じて、役柄を演じて自身の表現力や子どもたちの反応から気付いたこと。
  - ・ 演じる側の「見せ方・目線・声の張り・表情等」工夫一つで子どもたちの受け取り方が全く変わっていた。
  - ・ 自分が劇の事に集中して演じれば演ずるほど、子どもたちも真剣になって観てくれていることを感じた。反面、少しでも気を抜いた演技があると「つまらい、何なのかわからない」といった表情や背伸びなどの反応があり、表現することの難しさを知ると同時に子どもたちと向き合う時はやはり気を抜けない厳しさを感じた。
  - ・ スカーフ売りが昼寝から覚めた時、見つからないようにとその場が本当に木の上の様にして真剣に隠れていた子どもの姿がった。子どもたちがイメージしたり、大人の様子を観察する力は想像以上に大きいと感じた。
  - ・ 劇あそび中、自分たちは演ずることを意識していたが、子どもたちは演ずる前に本当の「遊び」としてその場の世界を楽しんでいた。表現することを子どもの頃から「遊び感覚」で身につけられたら、情緒豊かで感情表現が豊かな人間になれるのではないか。
  - ・ 子どもたちが劇を観ながら反応する表現が素直であるように、我々大人も「まずは自分自身が劇を楽しまないと、子どもたちも楽しくない。」といった観点を大切に、素直な感情表現ができるようにしたい。
2. 実践演習を通じ、今回のような表現活動が保育の現場で大切と思われること。
  - ・ 子どもたちは想像力が育ち、自分以外のものの気持ちを考えやすくなったり、自分の持っている価値観や世界観を想像し体験することができる。
  - ・ 子どもたちの参加型の劇や劇あそびでは、子ども自身のイメージで表現できたり友達との協調性を保ちながら活動するので、安心して個性も発揮でき自信につながると思う。

- ・大勢の友達の中や先生の前では恥ずかしがったり、なかなか自分の意見が言えない人見知りの子どもにとって、緊張をほぐし自然に関わりを持っていくことができる活動であり、子どもと保育者間のコミュニケーションを取る方法の一つであると感じた。
- ・劇あそびを通じて、楽しみながら「ルールを守る」ことができている社会性も身につけられると感じた。
- ・朗読劇での表現技術は、絵本の読み聞かせや歌、紙芝居、パネルシアター、保育発表会等保育現場の様々な場面に応用できる。
- ・指導者側にとって、子どもの持っているイメージを引き出すことにより、その子の新たな内面的な部分を発見できたり本心や本当の姿を理解しやすくなる貴重な場であり、保育の現場では必要なことである。

### 3. 指導者（幼稚園教諭・保育士など）になるにあたって、今後の抱負及び課題。

- ・子どもたちに伝わりやすい、分かりやすい表現力が大切であることを痛感したので、発声や活舌・読む力等の技術面も努力したい。
- ・子どもたちの前に立って伝えたり指導する表現力を身につける為には、難しいこともあるが、まず恥ずかしさを捨てるよう努力したい。（今回は失敗も多く、はじめは恥ずかしさもあったが、少しずつ朗読劇ができるようになると恥ずかしさもなくなり自信になった。）
- ・活動中の写真をみて自分たちの表情が乏しいように思え、子どもたちは日々様々な感情に出会うので、自分も手本となれるような表情を豊かにして子どもと関わられるようにしたい。
- ・指導者の表現力が豊かであればある程、子どもたちとのコミュニケーションも取りやすくなると感じ、日常保育の中でも、身体の向きや、身振り、手振り、顔の表情を豊かにすることが大切であると感じた。
- ・表現活動を通じ、子どもたちは予想外の行動も取るので、固定概念に捉われすぎず自由な考え方で物事を捉え、臨機応変に状況をよく見て動くことが大切と感じた。これは、保育者として子どもを言動・行動・表情・仕草等、多方面から考慮観察し、子どもの気持ちを本当に理解することにつながると感じた。

### おわりに

今回の表現活動の実践を通じて、学生たちはそれぞれ様々な感想や課題を体得した。演習教室や仲間内だけでは決して得られない貴重な体験であったはずである。混沌とした社会情勢の中であっても子どもたちは今も屈託のない笑顔と歓声を上げながら園庭を駆け回っている。その姿を見守りつつ新たな可能性を秘めた学生たちが、今回の活動で得た事柄をより具体的に子どもたちの中で活動し、各施設で活躍することを願って止まない。

上田女子短期大学附属幼稚園の先生方には日常保育の貴重な時間を頂き、今回の機会を与えて下さったことに心から感謝申し上げたい。

【引用・参考文献】

- ・岡田 陽 編 「朗読劇台本集②」 玉川大学出版部
  - ・岡田 陽 監修 方 勝 執筆「劇あそび『スカーフ売りと猿』（原作：The Peddler and His Caps より）日常保育の劇あそび 劇あそびシリーズ1」 玉川大学出版部
- ※大正年間に坪内逍遙が家族用児童劇「烏帽子折と猿の群れ」として発表。
- ・関谷 幸雄 著 「遊びのなかの演劇」 晩成書房
  - ・花輪 充 編 佐藤 厚 著 「遊びからはじまる学び～今、幼児の表現活動を問い直す～」 大学図書出版
  - ・岡田 陽 著 「子どもの表現活動」 玉川大学出版部